

月を掬う

由比和子

土から食み出た白い頭から羽のように広がった大根葉が、風に小刻みにゆれながら、アトリエ前の約二十坪程の畑を埋め尽くしている。昨年から精魂こめて育ててきた大根が収穫時を迎えていた。

四郎は引いてきたリヤカーを道端に止め、畑の中に入り一本一本抜いていく。右足が左足よりも短く生まれついたため、抜くたびに体がよろけるが、土から顔を出す大根のたくましさと目映いばかりの白さに頬がゆるむ。

四郎は、おやっさんに育てられた故こうして何とか百姓仕事をこなすことができている。おやっさんとは、この土地生まれの大地主で分限者の運野さんだ。親代わりのような存在なので、四郎は「おやっさん」と呼んでいる。

今日は、おやっさんの親友のアトリエ前の畑で大根引きだ。親友とは坂本繁二郎画伯のことだ。

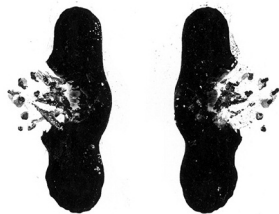
戦時中、食糧難を補うため奥様のカオルさんがこの畑で細々と野菜を作っていたが、腰を痛めたと聞いたおやっさんが俺を差し向けたというわけだ。

百姓仕事の中でも、この抜くという仕事は四郎にとって一番難儀だ。その上今日は小春日和で、力づくの大根引きは汗ばむ程だ。四郎は畑の縁に腰を下ろし休む。

静かだ。村の田畑の向こうには茶畑が広がっている。戦時中、茶畑一带にあった「特攻隊養成所」の演習の飛行音が空に響いていたが、今は音といえば大根葉のさわさわと擦れ合う音ぐらゐである。

四郎は顔を上げる。空は晴れ渡っている。茶畑のはるか向こうに鳶形山がなだらかな稜線を描いている。その右側には有明海だ。

一片の雲が茶畑の方から流れてくる。雲はゆつくりと耳



納山のうざんの方へ引き寄せられてゆく。

ふと、昨年、おやっさんのお供で行った「福岡玉屋」百貨店で催された『坂本繁二郎作品回顧展』の中の一連の雲の絵を思い出す。風景よりも画面の大半を占める空にさまざまな雲の表情を捉えたものであった。特に『鳶形山とびかたやま』の雲は印象に残っている。雲本来のためたう性質を絶ち、自分をそこに映していた。力強く描かれた雲が、まるで何か意思を孕んだ生き物のように見えたのだった。

雲に見入る四郎に、傍のおやっさんも同じように感じたのか、説明した。

「あのな、フランス留学から戻ってきた時でな、東京を避けて故郷に腰をすえて描いていくと決めたのやな。その意気込みがああ雲に表れとるな」

「そばってん、なんで田舎に引つ込みなすつたとやろ。せつかくフランスとかに行かれたのに」

咄嗟に四郎は「勿体なか」と思った。

「そりや、中央に出たらまた違つとつたらうな。ようわからんが、娘さんのことを考えたのかもしれないと、わしはひそかに思うとる。耳の不自由なみを、ちゃんには、静かな田舎のくらしの方がよかと思うたのやろな」

おやっさんは眉根を寄せて誰にともなく呟くと、さっさと見て回ると勢いづいた。

坂本画伯と懇意にしているおやっさんの説明で刺激的で楽しかった一日を思い出し、畑の縁に座った四郎の頭の中に、おやっさんの話とともに「福岡玉屋」での絵が次々と甦ってくる。

「渡仏前はよく牛を描いていたけんな。どの牛も坂本人のように見えるな。寡黙で我が道を行くような一途さがあるからな」

牛の連作を前に、おやっさんは笑った。

「一途さといつても、牛は柵の中だったり、木につながれていたり、どこかまだまだ自分を閉じこめて本分を發揮できていない臆病さを感じるな」

おやっさんはひとり納得すると、『うすれ日』と題した前に立つ。

「これはな、大正になって、第六回文展に出品したものだ。小説家の夏目漱石の目に止まってな、しばらく見入った後、『牛は沈んでいる。もつと鋭く言えば何か考え事をしてい』と評したそうだ」

絵は、今にも雨が降ってきそうな空と、それを映じた淀んだ海の色、手前の草地につながれ頭を垂れて佇む牛の姿は孤独で息がつまりそうに淋し気だった。

「背景の海はどこですか」

久留米や八女は海から遠い。上京した折のものであろう。「その夏に、千葉県の房総へ写生旅行に行っている。その海かもしれんな」

「でも本当に、下草の緑があつたとしても暗い絵ですね」
「青木が死んでから描いたものだ。色々複雑な思いがからんどつたのかもしれん。海を見に行つて牛を配するとは坂本らしかな。しかし、夏目漱石の目に止まつたことで喜んどつたわりには、夏目の方から会いたいと言つてきた時にや気後れして、それに応じることができなかつたのだよ。そこがあいつの大人しく引つ込み思案のところだよ」

いかにも残念そうに、おやつさんは鼻で笑うと、溜め息をついた。

次は一転して明るい絵だ。

「ほら、見ろ。光をふんだんに取り入れた印象派風だ。外光派ともいうな」

「張り物」と題した絵は、若い女が前屈みになつて板に布の糊づけをしている光景で、その背後は光の中に鮮やかな色の布が映え、干した真っ白い布が風にゆれている。

「ああ、新婚時代だな。うきうきして希望に満ちている」
他に、新妻の新聞を広げて読む姿の『新聞』など日常生活のひとこまが生き生きと描かれ、新婚時代の弾む気持ち伝はるようだ。

ふと会場を見回すと、中年の夫婦づれや老夫婦、若い女や男と、見に来ていた人はけっこう多かつた。戦後二年たち、気持ちにもゆとりができ、戦禍でくださった心に養分を求めてやつてきているのだ。どの目も、めくるめく色彩の魔術にかかつたように輝いている。

「ああ、この頃、青木の方はすすんでいたのでしたな」
突如、おやつさんが低い声で唸つた。

「おやつさん、さつきから青木とは誰のことですか。それに、すすんでいたとは、どういうことですか？」

四郎は興味をわいた。

「青木繁という絵描きだよ。もうひとりの、東京で学生生活を送つた時の親友だ。親友を超えて、ずいぶんと世話のやけるやつだった」

おやつさんは苦笑して、四郎の質問に小声で答える。

「坂本が新婚時代はな、青木の方は一番苦しい時だった。父親の危篤で久留米に戻つていた。栃木に内縁関係の福田たねさんと幼い息子の幸彦君を残してな。故郷に戻つたものの、待つていたのは借財と家族の扶養だった。父の死後は、青木は家族から疎ましがられ、揚句に一家離散だ。東京に戻ることも叶わず、知人宅を転々として肺を病みながらの放浪だ。そして死……。ああ、坂本の成熟した絵を見ていると、つい青木の哀れさを思いやってしまうなあ」

おやっさんは抑えがたいものを飲み込むと、再び絵に見入る。

「おーっ、ここはフランスでの絵だ。結婚そしてフランス留学と勢いにのつてる。当初、シャルル・ゲランの研究所へ通っていたが、半年でやめて、パリ郊外やブルターニュ地方へ旅して主に写生ときとる。そんな時の作品が並んどるが、やっぱ色が淡すぎて、わしはちよつと物足りなさを感じるが、坂本作品の始まりと言う者もある」

おやっさんが、フランスでの作品、「帽子を持てる女」、「パリ郊外」、「老婆」と見入りながら、自分の感想も交えて話す。

「次は馬だ。得意の馬だ。どうしても色合いが淡く平面的だからか、病気の馬とか陰で言われたりもしたが、しかし均整のとれた姿形は坂本ならではだな」

おやっさんが顎に指をそえ、何度も肯うなずいている。

「ほんなこと、ずつと馬の絵が並んでいますね」

「馬は彼の代表的作品だ。なんでも、フランス留学時代、パリ郊外で見事な三毛の馬を見た。それから馬にとりつかれたのだよ。『水より上る馬』は特に躍動感あふれている」
おやっさんは馬の絵をゆつくり見た後、「肉弾三勇士」の前に立つ。

「これは今までとは全く違う」

おやっさんが目をしばたかせる。四郎が横の説明文を読む。

「満州事変時、爆薬をつめた筒を抱えた三人の兵士が敵軍に向かつて前進し自ら玉砕、自軍の進路を開いた功績をたたえた記念館の壁を飾るために依頼されて描かれたもの縮小版……」

「坂本のやつ、戦争体験がなか。なかもんがよく描けたもんだ。何しろ、身長が一五三センチに三ミリ足らんで日露戦争の兵役を免れたのだからな」

「それだからか、表情がよく見えませんね」

「表情なんか描けんだろ。実際目にしたことがなかけん。だが、かかっていく勢いは三人の姿によく出ている。」

坂本はデッサン力はしっかりしていたけんな」

ふと、四郎は自分の右足に視線を落とす。自分だって、この足のせいで赤紙は来なかつた。近辺の若者が回りに見送られて出兵する姿は眩しく、目にするたびに忸怩たる思いに陥つたものだった。

そして、ここに来る途中で目にした、路傍に白装束で物乞いする傷痍軍人にふと思いをよせる。おやっさんが前に置かれた小さな缶に百円札を入れた。そこに視線を落とした彼らの目が何と悲し気だったことか。右足の不都合どころか爆弾で腕や足をもぎ取られた彼らはこの先どう生きて

いくのだろうか、四郎は慮おもんばかるのだった。

そして、日露戦争へ出兵しなかつた画伯はその時どんな生活をしたのかと聞いた。

「確か青木も近視性乱視とかで兵役は免れた。同郷の丸野豊と信州へ写生旅行ときとる。その時の坂本の写生はここにはなか。何故かその時、坂本は一枚も描けなかつたと言つとつたが、わかるなあ。終始、青木の強引な態度に圧倒されとつたのやろ。二人の性格は対照的だったからな」
確かにそれらしい絵はない。

おやっさんは独りごちると、次の絵群の前に佇む。

「あのアトリエにこもつて描いたものばかりだ。いわゆる静物画だ。戦争中だし、りんご、柿、植木鉢、箱と身近なものですませていた感じだな。だが、描き続けてきた者の重厚さが出ている。これからはのびのびと大作にも挑んでほしかなあ」

もう出口に近いところで、おやっさんが一連のこぢんまりとした絵に小声だが力強く言い放つて、その日は終わったのだった。

おやっさんと絵画を見に行ったことは、戦後初の楽しい遠出だった。

汗が引いた体に張りついた下着の冷たさで我に返つた四

郎は、改めてアトリエに目を向ける。全く生活臭を感じさせない、絵を描くためだけの二階建ての板張りの小さな家静かだ。今もそこで作品が生み出されている。

それらが人の目にふれた時、彼らの心の中にさまざまな感情、歓びをもたらすのだ。現に、画伯の『鳶形山』の異様な形の雲を思い出すと、気分も高揚してくるのだ。

高揚したところで、仕事に戻ろうと立ち上がった時、突然アトリエの戸が開く音がして坂本画伯が出てきた。

画伯は小さな体をふらふらさせて、近くのそれ用にある石に腰を下ろした。空を見上げて深呼吸をした。両腕を上へに伸ばしたり下ろしたり、首をきこきこと左右に動かしたり、気分転換のようだ。

画伯の姿をまともに見るのは今日が初めてだ。自分だつて、おやっさんの田畑で働く合間に月に数度の割でこの畑に來ているのみ。滅多なことでは画伯の姿を拝することはない。今日は奇跡に近い。

仕事は途中だが、せっかくだ、何か話したい。そう思つても緊張と動悸で言葉が出ない。このまま時間がたつのもはばか憚られて、四郎はリヤカーに大根を運ぼうとした時、画伯の方から話しかけてきた。

「君、運野君のそこからのお手伝いかい？」

「は、はい。奥様が腰を痛めてあるとかで、急遽、俺が

昨年から耕作しておりますんで」

「そりゃ、ありがたい。戦時中の食糧難はその野菜で大分助かった。引き続き野菜には困らん。元々アトリエもその畑も、運野君の田畑を提供して貰ったもんでな。しかも今、妻の代わりを出して貰つとる。運野君はどこまで人に親切なのか。ありがたい。しかし君は誰だったかな？ どうして運野君の家にいるのだ」

画伯は四郎を丸いメガネ越しにまじまじと見つめた。

「あの、事情があつて戦前から運野さんの家に引き取られ、農作業をしています。四郎と申します」

四郎は漫然と答える。

「そうだったか。相変わらず面倒見のよかやつだ」

画伯は不安定に立っている四郎の姿をちらつと見て言った。何となく聞いただけであつて特に深い意味はないのだ。

「あの……、画伯……、坂本画伯」

四郎はこの際こつちからも話そうと決めて、ひくひくと画伯に近づいて行つた。

「あの、昨年、画伯の絵の回顧展を、おやつさんと、いや運野さんと福岡玉屋まで見に行きました。とてもよかったです。特に俺は、雲の連作が気に入りました。雲がまるで生き物のように描いてあつて、うまく言えませんが、今にも動き出しそうで力強く、何かの意志を感じました」

四郎は一気に話して息を吐いた。動悸は大分おさまつていた。

「まず、わしを画伯と呼ぶなくてよろしい」

「では、先生とお呼びします」

坂本先生は納得したように頷くと話を続けた。

「遠いところ見に行つてくれてありがとう。特に意識はしておらんが、絵に自ずと内面が出るのは確かだよ。あの回顧展はこれまでのわしの人生の記録のようなものだ。裸を見られているようで恥ずかしかな」

先生は真つ直ぐ前を向いて、ぼそぼそと話した。

「恥ずかしかなどと、あげん人が見に来て、みんな元気を貰つて帰つたはずですよ」

「そうかな。開催できたのは、私を支えてくれた人達のおかげだよ。運野君もそうだし、画商の久我君も私の絵を売り込んでくれている。まあ何より福岡大空襲で玉屋百貨店は焼失を免れた。戦後すぐ上下水道などの応急復旧事業がいち早く開始されたことで、人々が市内へ行きやすかつたことも幸しいよ」

先生はまるで人事ひとごとのように話すが、四郎は先生が発散する独特の雰囲気ふんいきにぐんぐん引きこまれていった。

「坂本先生はどうして絵を描いてあるのですか」

「どうしてと訊かれてもな。物心ついた時には、もう絵

を描いていた。所構わず、襖や障子、畳に描いていたのを覚えておる。まあ、それを咎めん回りの寛容さがあつたのがよかつたのかもしれない。描かずにはおれんのだよ。だが、何でも描くわけではなから。『描いてくれ』と声が聞こえてくるのだ。わしに描いて欲しかもんが、わしを待っておる。わしはそれに従うだけだ。そのものは描いている内に色々なことを訴えてくるのだ」

先生は両拳を両膝の上に置いて力強く言った。

「へー、そういうことですか」

「そういうことだよ。わしは絵を描くことしかできん。

それも見たものを見たままに。単なる絵描きばかだよ」

先生が半白の顎ひげを右手でいとおしむように撫で下ろした。そして突然、石から立ち上がり、大根の山を見て、「あれを家へ届けてくれるのだね。ありがとう。わしはたくあんが好いとる」と言い、四郎の返事も待たずにアトリエの中に消えた。

四郎は黙礼して、引いた大根をリヤカーに積む。どうにか積み終え、リヤカーを引く。この先一キロ進むと町営住宅の坂本家がある。

これまで二度訪ねた。一度目は大根の種をまいた報告で、二度目は間引きした大根葉を持って行つた。これは塩もみ

したらおいしかと喜ばれたものだ。どちらも玄関先で、丁寧にお礼を言われたのみだ。どうも人を避けている気がしたが、今日はどうかだろうか。届けたらすぐ帰るつもりだ。

えつちらおつちらリヤカーを引く道々、たまに子ども連れや農夫・農婦に会うが、彼らとは顔見知りのせいもあるが普通にあいさつを交わす。懸命に働いている姿は胸を打つても、蔑視することはないようだ。

坂本家に着いて、「大根を引いてきました」と声を出す。すぐ奥様のカオルさんが出てくる。上背があるので四郎は見上げる形になる。

「まあ、こげんたくさん、ごくろうさんでした。ちよつと上がらんね」

思いがけず、カオルさんはリヤカーに盛られた大根の山を見て四郎をねぎらつた。

「いえ……」と遠慮したが、四郎はどこか意を決したようなカオルさんの強引さに導かれて玄関に入り、地下足袋を脱いだ。

その時、奥の空気が大きくゆれるのを感じたのは気のせいにか……。居間に通されて、ちゃぶ台の前に座る。ちゃぶ台の上には描きかけの絵と、その前に花瓶にさした南天がある。今し方まで、ここで誰かが絵を描いていた……。転がった鉛筆が周章てぶりを物語っている。

「ごめんなさいね。娘の^みを^りはどうしても人を避けるもんで、奥へ隠れてしもうて」

カオルさんが茶を注ぎながら、次の部屋へと続く襖を見やつた。四郎は襖へ視線を向ける。おそらく息をつめて、じつと四郎が立ち去るのを待っているであろう娘さんの姿を想像して、四郎は息苦しさ^と口の渴きを覚え、思わず出された茶をすすつた。

「みをりは生まれつき耳が聞こえずで、幼き頃は平気でおつたけど、娘になつて春先、花宗川^{はなむね}浴いの櫓を見に行った時、そのきれいさに思わず奇声を上げた^とね。それを蔑む若者の表情を見てから、家にこもるようになった^とよ。余程ショックを受けた^とでしょ」

カオルさんは堰を切つたように話すと、大きく溜息をついた。

あ、そういえばと、先生が渡仏後上京しなかつた理由が耳の不自由な娘さんのためかもしれない^と、おやつさんが回顧展で小声で話したことを四郎は思い出していた。

四郎は描きかけの絵を見つめる。今、この絵がみをりそのものだ。南天の楕円形の葉や、丸く光沢のある小さな実、細かい凹凸のある枝ぶり、緻密な鉛筆画だ。

「あの子、父親似なのか絵を描くのが好いとるとよ。毎日ここで描いとるけど色をつけん^とね。主に花を描くけど、

色をつけるとどんなに美しい絵になるかと思うけど、妙に頑固で水彩道具も要らん言うてね」

カオルさんはふつと顔をほころばせた。

「ばつてん、えらくうまかですね」

四郎は、みをりにここへ戻つて絵の続きを描いて欲しいと思つた。

「あの、俺もう帰ります。お茶おいしかったです」

残りの茶を飲み干すと、四郎は立ち上がった。これ以上みをりを奥へ閉じ込めておくのは辛かつた。

「そうかい。今日は本当にありがとう。漬物にしたら届けるよ」

カオルさんは四郎を玄関先で見送つた。踵^{かかと}を返した四郎は後ろ髪を引かれる思いにかられ、戻つて気になつたことを訊いた。

「あのう、つかぬことを尋ねますが、みをりさんは人との会話はできられる^とですか」

「できるよ。そりやもう大変だつたよ。手を使えば猿まねと言われるでしょ。だから物の絵を描いて、そこから表記の字と口の形を教えこんだ^とよ。夫も協力してくれてね。もうほとんどの言葉は覚えてるよ。読唇術も身につけているし、紙に文を書いて相手との会話もできるはずよ。夫が忘れたお弁当をアトリエへ届けたり、私が買物に行く時

はついできたりする以外は、ほとんど毎日、家の中で鉛筆画を描いているのだよ。せめて今日は四郎さんにだけでも慣れてくれたらと思つたけど、ちよつと性急すぎたかね」

カオルさんは顔を曇らせて首を傾げた。だが、思いきりたまつていたものを吐き出したようで、目元はすすきりしていた。

「また、今度おじやまします」

四郎は大変な責務を背負わされた気がしたが、帰る足取りは軽かった。

四郎は空になったリヤカーを引きながら自分のことを考へる。おそらく手に負えないと悟つた親が、口減らしも兼ねておやっさんに預けたことは、半分は親から捨てられたとひがんでいたが、自分にとって幸いしたのだと今になって思う。それは、こうして堂々と歩いているからだ。

おやっさんは、よく自分を町へ連れて行つてくれた。映画を観たり、帰りには食堂へ寄つたり、昨年は坂本先生の回顧展にも電車を乗り継いで連れて行つてくれたのだ。村の青年団にも参加している。おかげで足の不具合も、だんだん平気になっていった気がする。

みをりさんだつて、堂々として欲しい。来客を避けて身を隠す姿を思うと心苦しくなり、四郎はまだ見たこともないみをりを不憫に思うのだった。

四郎はリヤカーの引き棒が急に重たく感じて、力強く引つ張つた。

四郎は夕食をおやっさんと奥様の三人で囲んでいる。息子さんがいるが既に独立して遠方にいるため、通常三人の食卓である。

奥様は母親のような存在であるが、どこか使用人の枠を外さないものを感じて、由紀おばさんと呼んでいる。

「やっぱ酔牡蠣はうまかばい」

おやっさんが器から酔牡蠣を箸でつまんで口の中で二度嚙むと、つるつと喉へ流し込んだ。

「今日、いつもの有明から自転車の牡蠣売りが来ましたばつてん、毎回買うけん、自転車呼び止めんでも最近は向こうから寄つていつてくれますすと」

「そりや、よか。買い損なうことはなかな」

つるつと飲み込む由紀おばさんに、おやっさんが笑顔を向ける。

「四郎も食べる。精がつくぞ」

ところが、四郎はどうも体に合わないらしく、二度腹を壊している。三度目は警戒して箸をつけないでいる。

「そうか、苦手だったな。せいじゃ、わしが貰う」と、おやっさんは四郎の皿を引き寄せ、つるつと食す。

後は、がめ煮を盛った大皿と汁物だ。四郎はがめ煮の中の鶏の足を持って皮をむしって食べる。こりこりした皮が四郎は大好物だ。指で足首から四本の足の皮を万遍無くむしり取る。

「おまえが好物だからあえて一緒に煮ているが、足ばかり食べて身も食べろ」とおやっさんが言うが、遠慮しているわけではない。鶏の足指の皮をむしっていると、ひとつの映像が勝手にうかぶのだ。同じ動作をしている数人の男の子や女の子。おそらく、おぶわれた母の背中越しに自分が見た、かつての貧しい家族の光景なのだ。

おぼろげな家族の記憶から、自分だけが恵まれているのではないかと考えてしまうのだ。

そして今以上に望むことは、ぜいたくなことに違いない。毎日食べて働いて寝るの繰り返し。わずかの給金ではあるが、使い方もわからず貯めている。貯めて何に使うかも決めていない。

「四郎、おまえ何か考えておるな。今日はちと様子が違うぞ」

おやっさんが箸を止めて、四郎に探るような目を向けた。

「あ、嫁を貰うか？」

おやっさんは茶化すように笑って、早すぎるし現実味が乏しいと思ったのか口を閉ざした。確かに、いつまでもこ

のままとはいかないだろう。四郎が考えているのは、自立という世間的なことよりも、もっと違うものであった。

毎日、地を這うようにして人が生きるための食料を作る他に、何か人の心に訴えるものを、坂本先生の絵のようなと言ったらおこがましいかもしれないが、人の心を打つものを学びたいと言ったらどうだろう。分を弁えないぜいたくだと、おやっさんが一蹴することはないだろう。おやっさん自体、かつて福岡工業学校で教鞭をとる傍ら、歌人の大隈言道（こしまち）の研究をしていたのだ。食べるため以外のことに没頭していたのだ。

由紀おばさんの「ご飯のおかわりはよかね」の声に我に返った四郎は、「よかです」と返事して周章で汁物の残りをすすする。

「あ、そうそう、四郎、青木繁の絵が見たかと言ったな。画集が見つかった」

「え、若くして死になさった画家の人ですか。見たかです」

「あとで、わしの書齋へ来い」

坂本先生の回顧展の帰りに話したことを本気で対応してくれるとは思わなかったのだ、うれしかった。

書齋は陶製の火鉢に炭が赤々と燃えて温かかった。机上にはB4判の分厚い本が置いてある。